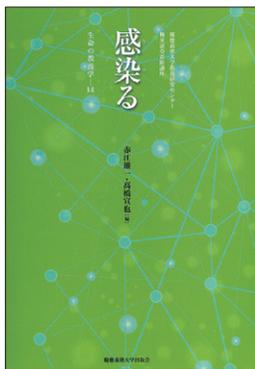


慶應義塾に関連した出版物や教職員の最新著書などを中心に、本に関する情報をお届けします。

人類は「感染る」世界に いかに対してきたか

『感染る―生命の教養学14』

慶應義塾大学教養研究センター、赤江雄一（文学部准教授、高橋宣也（文学部教授）編
慶應義塾大学出版会／2400円（2019年9月）



感染症は私たちの生活文化に大きな影響を及ぼす。本書はまず「I科学の目で見える感染」でウイルスや細菌感染のメカニズムとその予防、ワクチンによる感染症対策など、おもに医学の視点から感染を説明。次に「II人類の歴史と感染」では人類がいかに感染症に対してきたかを、欧州のペスト流行などを考察しながら歴史的視点を交えて解説している。そして「III文化と感染」では、哲学、文学、コンピュータサイエンスの観点から人の意識の世界での「感染る」にアプローチしている。「感染る」をテーマに開催された教養研究センター「生命の教養学」を書き集めた一冊。

教職員執筆の最新刊

●田中辰雄（経済学部教授）ほか著

『ネットは社会を分断しない』角川新書／860円（2019年10月）

●加藤眞三（看護医療学部教授）著

『肝臓専門医が教える病気になる飲み方、ならない飲み方』ビジネス社／1400円（2019年12月）

●中野冠（システムデザイン・マネジメント研究科教授）監修、空飛ぶクルマ研究ラボ著

『空飛ぶクルマのしくみ―技術×サービスのシステムデザインが導く移動革命』日刊工業新聞社／2000円（2019年12月）

●岩間一弘（文学部教授）編著

『中国料理と近現代日本―食と嗜好の文化交流史』慶應義塾大学出版会／5200円（2019年12月）

●鶴岡路人（総合政策学部准教授）著

『EU離脱―イギリスとヨーロッパの地殻変動』ちくま新書／860円（2020年2月）

●今井芳昭（文学部教授）著

『影響力の解剖―パワーの心理学』福村出版／2300円（2020年2月）

慶應義塾この一冊

『夢中伝―福翁余話』

荒俣宏著
『ハヤカワミステリマガジン』早川書房（2019年9月号より連載中）／各1200円



ジャンルを超えた博覧強記の作家として知られる荒俣宏氏が今、「人生最後の小説」という意気込みで福澤諭吉伝に取り組んでいる。世に福澤が主人公となる小説が少ない理由を、「福翁自伝」が面白すぎるから」と語る荒俣氏。膨大な文献をもとに同時代の偉人たちと対比させながら新たな福澤像を紡ぎ出す。令和の時代に始まったその挑戦に大きな期待が集まっている。



第1話扉写真上…◎慶應義塾福澤研究センター／写真下…◎射和文庫撮影II
荒俣宏